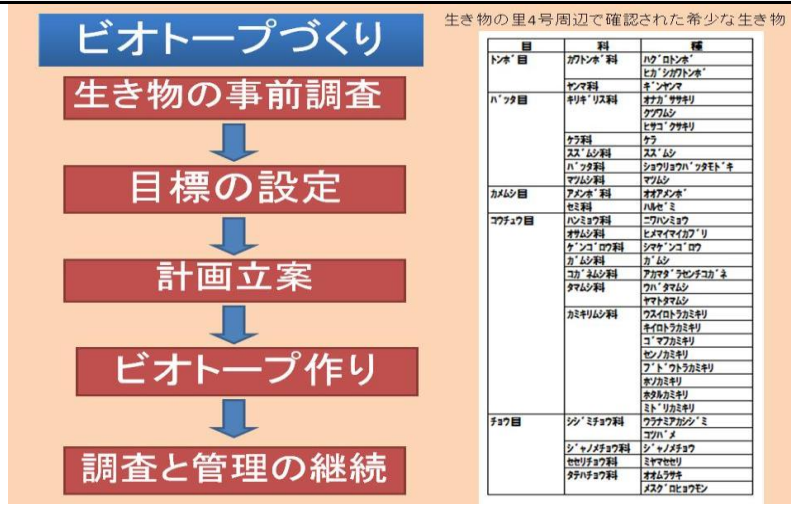


里地里山の保全・活用の取組における課題と技術的方策等

分類	計画策定と実行プロセス
手法名	生物多様性保全のための調査手法と調査データの運用方法
主体	東京農業大学短期大学部 環境緑地学科 緑地生態学研究室 東海大学教養学部人間環境学科自然環境課程
背景(地域の課題)	<p>生物多様性を保全していくための調査は、対象となる地域の気候、地形、土質、生息する動植物など多様な要素を取り扱うことになる。そのため、生態系の状況を把握するために様々な側面に光を当てた調査手法が求められるとともに、得られたデータをどのように保全整備活動に活かしていくのかといった実践面での運用方法が課題となっている。</p>
手法／方策の詳細	<p>秦野市では、希少な野生生物の生息環境保全のため、休耕田となった湧水湿地等を「生き物の里」として指定している。この生き物の里をフィールドにして近隣の大学や企業が研究の一環として生物調査や保全活動に参加しており、様々な調査手法が実施されている。</p> <p>(1)植物調査と活用方法(図1) 複数の保全エリアにおいて、畦畔部、水田内部、畔部などゾーニングを行って植生を調査を実施。環境条件や生育する植生の対応状況を比較検討するとともに対象種の生活史についても考慮することで、具体的な保全対策を講じる指針を導き出すことができる。</p> <p>(2)水生生物調査と活用方法(図2) アカハライモリは、腹部斑紋が個体ごとに異なり個体数を把握しやすいため、生息環境状態の把握に適している。生息個体数を把握することによって、ビオトープ等の水辺整備のエリアや方法を検討するデータを提示することが期待できる。</p> <p>(3)トンボ類調査と活用方法(図3) マーキングによる再捕獲調査などによってトンボの生息実態を把握することで、発生時期や季節ごとの生息拠点の変化を確認することができる。調査データは異なる多様な環境条件をどのように保全整備すればよいか検討する際に役立つと考えられる。</p> <p>(4)哺乳類調査と活用方法(図4) 食物連鎖の上位にある哺乳類の生息実態を把握することで、その他の動植物など生態系への影響、哺乳類を介した病気やヤマビルが発生、農業被害等についての対策を検討することが期待できる。哺乳類のフィールドサインとセンサーカメラを用いることで、個体ごとの生息数を確認することができる。</p>
手法・技術的視点	<p>(1)多様な調査手法 植物、水生生物から哺乳動物まで、多様な生物種を対象にした調査手法が提示されており、具体的な保全整備方針を考案する際に有効なデータ提供を期待できると考えられる。</p> <p>(2)データの活用方法の提示 得られたデータを生き物の里という具体的な保全活動フィールドで活用することで、実践的に保全整備対策に活かすプロセスが提示されている。理論面だけではなく実証的に効果を検証できる点で里地里山保全活動推進上、特に着目される。</p>

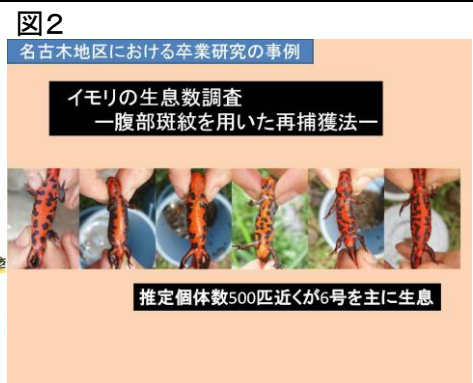
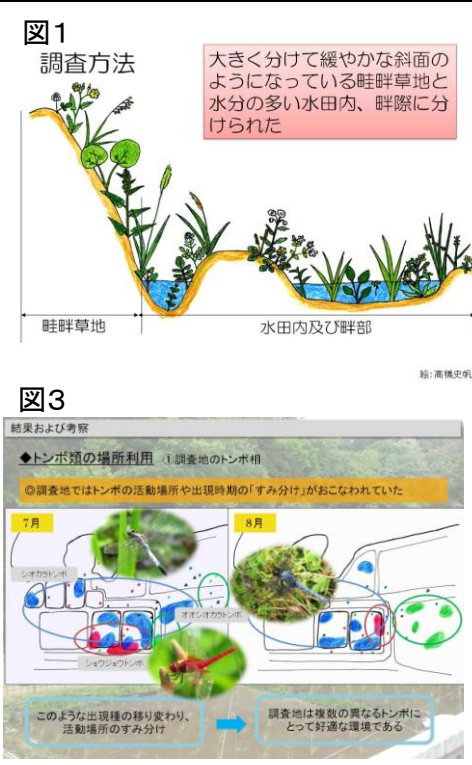
実行プロセス・運営体制のイメージ



生き物の里におけるビオトープ整備の実行プロセス
生き物の里における活動
対象要素の構成



図・写真資料



参考資料

里なび研修会in神奈川県パワーポイント資料(井下原元、平野杏奈、飯塚祥太、坂巻央)